

令和5年 12月 11日

東松島市議会議長 小野 恵 章 様

(会派名) 清 新 会

代表者氏名 阿 部 勝 徳

会 派 活 動 実 施 報 告 書

東松島市議会政務活動費をもって、下記の会派活動等を実施したので、報告します。

1 会派活動の項目(該当を○で囲む)

調査研究費、 研修費、 広報費、 広聴費、 要望・陳情活動費、 会議費

2 活動名称： 視察研修

3 実施期日： 令和5年11月17日(金)～11月19日(日)

4 活動成果：

・八戸ポータルミュージアム

中心市街地の賑わい創出事業、文化芸術の振興、ものづくりの振興、観光振興など、この施設の役割と効果は大きいものがあり、まちの規模は違うものの中心市街地活性化の必要性を再認識した。

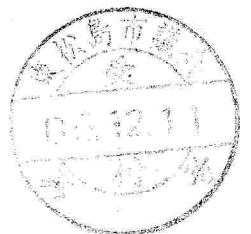
・八戸ブックセンター

八戸に本好きを増やし、「本のまち」にするため市営の書店を開設し、しかも民間の書店と競合しないで運営しており、その発想と運営努力について参考にしたい。

・館鼻岸壁朝市

毎日曜日朝に300店以上の出店があり、総距離800mに及ぶ巨大朝市は「協同組合湊日曜朝市会」が自主管理運営をしており、朝市の成功モデルと評価されている。今後のまちづくりの参考としたい。

5 添付書類： 別紙報告書



清新会 視察・研修報告書

令和5年12月//日

研修先：青森県八戸市

期 間：令和5年11月17日（金）～11月19日（日）

11月17日

八戸ポータルミュージアム

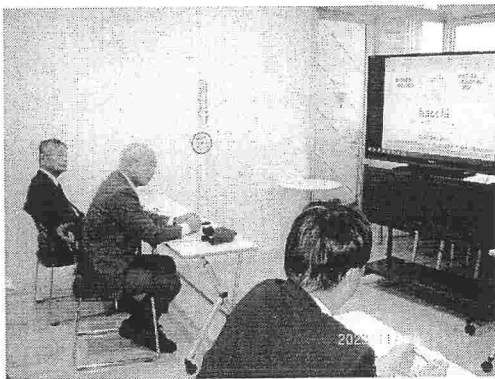
【研修事項】八戸市の文化観光交流、賑わい創出の取組について

八戸市は人口22万人、青森県内第2の都市。日本有数の水産都市であるとともに、北日本随一の工業都市。

八戸ポータルミュージアムは、新たな交流と創造の拠点として賑わいの創出・観光と地域文化の振興を図りながら、中心市街地と八戸市全体の活性化のために開設された公共の文化観光交流施設で愛称を「はっち」と称する。建設には八戸市の中心市街地の衰退や商業機能の低下という背景があり、「八戸市中心市街地活性化基本計画」の取組みの一つで、全体工事費30億8千万円、地上5階建てで平成23年2月に開館した。

「はっち」の事業は、1、会所場づくり（誰でも気軽に立ち寄れる空間づくり） 2、貸し館事業（シアター・和室・ギャラリー等の貸し館） 3、自主事業 ①中心市街地の賑わい創出事業 ②文化芸術の振興 ③ものづくりの振興 ④観光振興等としている。施設の運営は、正・副館長はじめ正職員24名の体制で行っている。

まさに八戸の玄関口（ポータル）にふさわしい観光展示に加えて、季節ごとの賑わい創出イベントを開催している。一方で、市民による発表会や展覧会等も行われ、市民活動のサポートしている。令和5年2月に開館12周年を迎え、4月には来館者1000万人を達成した（年間来館者約82万人）。これまでの成果として、気軽な交流の場やイベント、文化芸術の展示発表の場として市民活動を後押しして地域の活力を創出してきたとし、また「はっち」の開館により中心街再生のきっかけとなり八戸ブックセンター、八戸まちなか広場マチニワ、八戸美術館等の集積により都市の魅力を高め、更なる可能性につながっている。さらに、全国各地から多数の視察は「はっち」のみならず八戸市の知名度やイメージアップに大きく貢献している。



【館内の説明を聴取】



【1階のエントランス部分のをぞむ】

11月18日

八戸ブックセンター

【研修事項】本のまち八戸・市営書店「八戸ブックセンター」の取組について

八戸ブックセンターは、八戸に「本好き」を増やし、「本のまち」にするための、「本のある暮らしの拠点」という考えに基づき①本を読む人を増やす ②本を書く人を増やす ③本でまちを盛り上げるという3つの基本方針を定め、それに則った施策を行っている。

前市長の公約でスタートし、2016年に開館して7年目を迎えている。書店の機能を持ち合わせた公共施設で、本の販売にとどまらず、本を通じた市民交流及びまちづくりの拠点施設としての機能を有している。運営は八戸市観光文化スポーツ部・文化創造推進課の事務として4名の市職員を配置し、「本のまち八戸」を推進する拠点施設として民間書店や市内の大学・学校図書館との連携やサポートも行っている。

一般的な図書館や、民間の書店には無いまったく新しい「書店」のかたちだとし、本を手にとってもらい本との偶然な出会いも誘う狙いがあり、ジャンルごとに本をセレクトして取りそろえる「セレクトブックストア」機能を備えている。

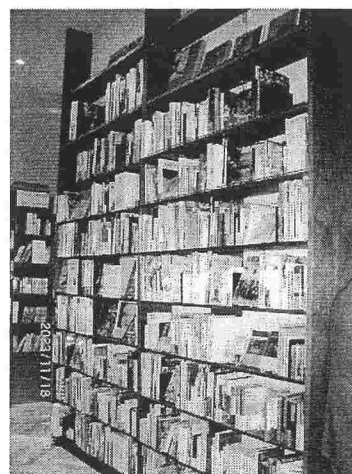
また、およそ公共施設（市営書店）らしくなく、館内ではソファはもちろんハンモックもあり、コーヒーやビールを片手にゆったりと本を読むことが出来る。一方で、本を執筆したい人向けには市民作家登録をしてもらい「カンズメブース」と称する執筆用書斎(?)の貸し出しも行っており、趣味で執筆している方やプロの作家の方など幅広い利用があるとしている。「読書会ルーム」は市内の読書団体などへの貸出のほか、ブックセンターの企画事業や短歌会など多様に活用されている。

本のまち八戸ならではの取り組みとして「マイブック事業」があり、子どもたちに向けては、市内の全小学生へ2000円のマイブッククーポン(500円×4枚)を配布し、書店で本を買う体験を勧めているとのこと(マンガや参考書類は除き、市内の書店と連携して推進)。お役所らしくない、まったく新しい書店に驚きを禁じ得ない。

八戸では、八戸ブックセンターを拠点に「本のある暮らし」が実現している。



【読書会ルームで説明を聴取】



【テーマごとに陳列する
セレクトブックストア】

11月19日

八戸市 館鼻岸壁朝市

【研修事項】朝市開催の現状及び八戸市の経済効果などについて

協同組合湊日曜朝市会・理事長 慶長春樹氏の説明によれば、朝市開催場所の岸壁を県から無償で借り受け、出店申込みの許可をうけた店舗が、3月中旬から12月までの毎週日曜日早朝に約300店が店を構え、総距離は約800メートル、駐車場は約500台、営業時間は日の出から午前9時頃までの巨大朝市で、北東北の元気印となっている。

運営は組合の自主運営で、行政の関与は無いとしている。出店料は一区画(3㍍×3㍍)年間18000円(新規入会金は15万円)、区画数は470カ所。

店舗業態は生産農家25%、仲卸業者や漁師の魚屋30%、飲食関係40%、その他5%としている。コーヒー、ラーメン、そば・うどんなど喫食店舗が多いのも特徴である。

平成24年に八戸短期大学が経済効果を調査した際には、来場者は毎週1~2万人、売上は2000万円、経済効果20億円と報告。また、数年後の弘前大学の調査によれば、来場者は2万人以上(観光客が3割余り)、売上は2500万円前後。経済効果は40億円から50億円との報告があったとしている。

朝市のとてつもない出店数と多数の来場者には驚くばかりで、まさに八戸の観光スポットと頷ける。 加えて、八戸市における経済効果は相当なものとは十分推測できる。



【夜明け前から大勢の来場者】



【人気店は黒山のような人だかり】